



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	「リーナハルト・ショイベルの英雄本」に関する諸問題：日本人ゲルマニストの視点から
Author(s)	寺田, 龍男
Citation	北海道大学大学院教育学研究院紀要, 118, 179-193
Issue Date	2013-06-30
DOI	https://doi.org/10.14943/b.edu.118.179
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/52898
Type	departmental bulletin paper
File Information	AA12219452_118_10.pdf



「リーンハルト・ショイベルの英雄本」に関する諸問題

—— 日本人ゲルマニストの視点から ——

寺 田 龍 男 *

【目次】

1. はじめに
 2. 「リーンハルト・ショイベルの英雄本」とは何か
 2. 1. 内容
 2. 2. リーンハルト・ショイベル
 3. 現在の研究課題
 4. 写本筆者の独自性
 4. 1. 「戦士」を表わす語彙
 4. 2. *weigant* と結びつく形容詞
 5. 「聖者」—展望にかえて
- 【キーワード】 英雄本 写本 写字生 戦士 聖者

1. はじめに

ドイツ語圏では現在、中世文学の一ジャンルである「英雄叙事詩」に属する諸作品の校訂作業が進められている¹。この分野ではすでに複数の翻訳がある『ニーベルンゲンの歌』が日本でもよく知られているが、これとともに他の様々な作品が新たに校訂されつつあるほか、『ニーベルンゲンの歌』では従来顧みられることの少なかった写本も刊行されるようになった。

筆者はいうまでもなく、こうした作品をとりまく世界とは異なる文化圏に属する者である。しかしながら従来から独自の視点で研究を進めている。小稿では上記の編纂作業の礎となる、あるいは少なくとも貢献たりうると期待したい作業について、現在までの経過と今後の展望に関する若干の報告を行う。研究自体の主たる目的は、「リーンハルト・ショイベルの英雄本」(Lienhart Scheubels Heldenbuch: 以下原則として「英雄本」と略す)に記載された作品『ヴィルギナール』(Virginal)の編纂作業に資することである²。そこでまずこの写本に関する現在の研究状況と課題を記し、次に『ヴィルギナール』研究への展望を述べることにしたい。

2. 「リーンハルト・ショイベルの英雄本」とは何か

2. 1. 内容

この「英雄本」は1480年から90年頃に成立した紙写本である。現在ウィーンのオーストリア

* 北海道大学大学院教育学研究院教授

国立図書館に15478番写本として架蔵されている³。リーンハルト・ショイベルとは、かつてこの写本を所有していた人物の名前である。

この写本には以下の6作品が収録されている。

1. 『ヴィルギナール』(Virginal 写本V₁₂)
2. 『アンテロイ』(Anteloy)
3. 『オルトニート』(Ortnit 写本y)
4. 『ヴォルフディートリヒ』(Wolfdietrich 写本y)
5. 1. 『ニーベルンゲンの歌』(Das Nibelungenlied 写本k) 前半「ゼイフリートとクレンヒルトの結婚」
5. 2. 『ニーベルンゲンの歌』(同上) 後半「エッツェルとクレンヒルトの結婚」
6. 『ロレンゲル』(Lorengel)⁴

以上のうち『ヴィルギナール』・『オルトニート』・『ヴォルフディートリヒ』・『ニーベルンゲンの歌』はいずれも英雄叙事詩に属する作品である。これらの作品は単に同じジャンルに属するだけでなく、それぞれで「婚姻」が重要な意味を持つという特性が共通している。これに対して『アンテロイ』は内容が異なるものの、『ヴィルギナール』を除く英雄叙事詩の3作品と同じ韻律形(「ヒルデブランド詩節Hildebrandston」)で構成されており、最後の『ロレンゲル』は韻律形が特異である(「クリングゾールの黒い調べ」⁵)ものの、英雄叙事詩の典型的人物が脇役ながら登場する。この写本が「英雄本」と称される所以である。

英雄本は他にもいくつか残存しているが、それらと比べてこの写本の大きな特徴といえるのは、すべての作品が同一人物によって書かれているという事実である。合計約54,000行におよぶ作品集がひとりの手で書かれるというのは、けっしてあたりまえのことではない。写本どころか作品レベルでもそうであり、ひとつの作品が複数の写字生によって書かれている例は枚挙に暇がない。『ニーベルンゲンの歌』の諸写本についてみると、同じ写本の中で書き手が複数いる例の方がはるかに多いのである⁶。

2. 2. リーンハルト・ショイベル

リーンハルト・ショイベル(原表現 *linharz schewbel*: 今日では通常Lienhart Scheubelと表記される)という名称は、写本冒頭の「この本は(…)ブライテ・ガッセのリーンハルト・ショイベルのものである」(*Daz buech [...] Ist linharz schewbels an der prayten gassen.*)という書き込みに見られる。「ブライテ・ガッセ」(現代語でBreite Gasse)が地名(逐語訳で「広い通り」)を意味することから、1856年にウィーンのヨーゼフシュタットにあるエスコラピオス教会の施設でこの写本が発見されて以来、幾人かの研究者がウィーンで書かれたものとみなし、この人物と居所の探索と同定を試みてきた。しかし結局、ウィーンの公文書館関係者に本格的な調査を依頼したクセニャ・フォン・エルツドルフが1972年、15世紀末のウィーンではブライテ・ガッセという地名もショイベルという人名も、残された古文書からは確認できないという結果を報告した⁷。

だが1979年、ヴェルナー・ホフマンはドイツ語圏のさまざまな都市の公文書館に調査を依頼した成果として、このブライテ・ガッセがドイツ中部の都市ニュルンベルクに存在する

こと、そしてショイベルという名の家系があっただけでなく、リーンハルト・ショイベルという名前の記録が複数の世代にわたっていることを明らかにした。(Breite Gasseは現在もある。)とりわけ注目すべきは、1496年に同名の人物がブライテ・ガッセの家を売ったこと、そしてこの人物の妻がドロテア(Dorothea)、二人の息子がヒエロニムス(Hieronymus)および父親と同名のリーンハルトだったことが記された記録である⁸。そのため現在では、父子どちらかのリーンハルト・ショイベル(おそらく父親)が、「英雄本」の所有者だったと認められている。

この人物が社会でいかなる地位にあったかはわからない。当時のニュルンベルク市参事会を構成する門閥が原田晶子により年代別に示されているが、そこにショイベルという家名はない⁹。しかし古文書に家名が何度も記載されていることや、表紙を含めて516枚(すなわち1032ページ)におよび、わずかではあるが挿絵も施された手書き写本を所有していたことから、かなり裕福であったと想定してよからう¹⁰。

3. 現在の研究課題

ショイベルに関する問題はむしろ、彼自身が所有していた英雄本とどのような関係にあるかである。この点についてはすでに研究史でいくつかの可能性が指摘されている。第一に単なる「所有者」にすぎないこと。この場合はいかなる手段で手に入れたにせよ、ショイベルは内容や成立に関与していない¹¹。第二は、この写本の「筆者」であること¹²。第三に、筆写の際に典拠となった作品の文言を変更した「改作者」ないし「校訂者」の可能性¹³。そして最後に、ショイベルが写本製作の「依頼者」だった可能性である¹⁴。大きく分けると以上のように諸説を分類できる。しかしどの論者も推定の確たる根拠を示していない。いわゆる「だらう解」であり、今後の研究の進展が望まれる。むろん、明らかな証拠が発見されない限り、推測の域を出るものではなかろう。だが考察の前提として、以下の点を確認していくことは無駄ではないと思われる。

中世の文芸作品は、たとえオリジナルであれその写本であれ、まず「依頼者」(Gönner/Auftraggeber)の存在なしには成立しえなかった。依頼があつて初めて(小稿が対象とする写本ではひとまず措いてよい)「作者」(Autor)へと進む。そして「書き手」(Schreiber)を考える必要がある。作者と書き手が一致するとは限らないからである。さらに(今日風にいう)「校訂者」(Bearbeiter/Redaktor)が別人の可能性もある。そしてできた作品は「朗読者」(Rezitator)により「聴衆」(Publikum)に伝達されるのが一般的だった。場合によっては「受け手」(Adressat: 典型的な例は「献辞」の対象者)に焦点を当てることが必要になる場合もある¹⁵。

ここまで挙げた関与者が、いかなる場合もすべて別人と決めつけることはむろんできない。ある部分では同一人物が二つないし複数の機能を果たしていたことも考えられるからである。とくに写本製作の「依頼者」と献辞の「受け手」はその可能性が高いだろう¹⁶。ショイベルが依頼者だった可能性は小さくないが、どこまで作品成立のプロセスに関与したかについて考えるなら、これらの関連因子を今一度考慮する必要がある。

同じように解決が期待される課題に、写本成立地の同定がある。先に述べたように、かつ

ては写本が発見されたウィーンが成立地とみなされていたが、所有者リーンハルト・ショイベルがニュルンベルクに住んでいたことが明らかにされて以来、専門書から概説書まで、成立地をニュルンベルクとみなすものが多い。厳密には証明されていないのだが、こうした見解が説得力を持つ理由はある。それは、ほぼ同年代にニュルンベルクで成立したとみられる英雄本が他にも存在するなど¹⁷、この都市が文芸作品の書写や印刷に大きな役割を果たしていたからである¹⁸。印刷本の場合は表紙に工房名が記されていたり、活字の形状で工房が特定できる場合もあるので、成立地や年代の同定は筆写本より容易である。

古文書学の専門家ギーゼラ・コルンルンプフは、ショイベルの英雄本の成立地をニュルンベルクと断ずることはできないと一貫して主張している¹⁹。コルンルンプフはその疑義に立ち入って論述しているわけではないが、傾聴すべき論である。なぜならすでに1961年、ヘルマン・メンハルトの研究により、この「英雄本」に収録された各作品の言語には（同一人物によって書写されたにもかかわらず）統一性がないことが明らかにされているからである。メンハルトによれば、各作品が書写された際に、典拠それぞれが異なる方言で書かれていたため、結果として出来上がった英雄本もバイエルン方言・オーストリア方言・低地アレマン方言に基づく部分から成る混合形態となったのである²⁰。先に引用したエルツドルフは、この写本を書いた人物自身の使用言語がいかなる方言だったかはあらためて追求しなければならない課題である、と述べている²¹。しかしメンハルトの研究以来50年以上、エルツドルフの指摘からも40年以上経過しているが、（管見の限り）本格的な調査はおこなわれていない。もとより、筆者には15世紀末のドイツ語圏における各方言の問題に立ち入る能力がない。しかし専門の研究者による解決が期待される課題であることはあらためて強調したい。

そして最後に、「英雄本」に収められた作品のうち『ヴィルギナール』は校訂版の刊行が1860年、『オルトニート』と『ヴォルフディートリヒ』は1906年で、現在の研究水準には対応しきれないものであること、したがって新たな校訂版の刊行が強く望まれることを付言したい。（それゆえ下記の統計表のデータも新しい版による検証が必要であることをここに明記する。）

4. 写本筆者の独自性

今、写字生は各作品の原典の方言に引きずられていると述べた。しかしそれはけっして、その人物が個々の典拠を一字一句忠実に書写したことを意味するのではない。原典にどこまで従ったか、あるいは何を变えたのかの判断は、原典とその書写作品の両方を比べることができる人物にしかできない。つまり厳密にはもはや不可能である。

しかし中世（文学）研究ではすでに常識であるが、今日の著作権のような概念は当時の社会には存在しなかった。ラテン語の聖書や教父文書は文言の改変が厳しく禁じられていたが、文芸作品の場合は話が別で、写字生が典拠の表現を改める方がよいと判断すれば、書写の際に自分の意思でこれを変更するのは何ら問題ではなく、むしろそうすることによってよりよい「作品」になるという観念が支配していたのである。

実際洋の東西を問わず、作者は自分の作品の文言が後の人たちにより改変されることを知っていた。自分の表現に誤りがあれば後の人はそれをあらためてほしいという文言はしば

しば見られる。通常これらは謙譲表現とされるが、文芸作品のように作者の個性が表われる(ないし表わしうる)場合、文字通りの「謙虚さ」とみなしてよいかという問題については検討の余地があるだろう²²。

さて、「リーンハルト・ショイベルの英雄本」の諸作品がすべて一人の人物によって書かれてことはすでに述べた。この人物の「個性」を見てとれる現象はないかと考え、特定の語野に属する単語を全作品について目下調査している。まだその作業が完了したわけではなく、また個性が表われていながら見落としている事例も多々あることと思われるが、ここで今までの調査の結果を報告したい。

4.1. 「戦士」を表わす語彙

筆者はここ数年、『ヴィルギナール』の主要3写本(V10, V11, V12)に基づく校訂版を用い、それぞれにおける「戦士」を表わす語彙の使用傾向を調査し、各本の特性を明らかにする作業に従事している²³。そのうちのひとつV12がここでとりあげる「リーンハルト・ショイベルの英雄本」に書かれている。『ヴィルギナール』V12に見られる特徴が「英雄本」全体でも確認できれば、それはこの写本の写字生がもっていた個性の現われと解釈できるのではないだろうか。V10とV11の両写本と比べてV12の特徴として目立つ点はいくつかあるが、ここではまず「戦士」を表わす語彙の出現傾向が、この「英雄本」全体ではどうなっているかを例として考える。

古くからドイツ文学の作品では「戦士」を表わす語として、*degen*, *helt*, *recke*, *weigant* (古形*wigant*) が用いられてきた。これは『ヴィルギナール』でも同じである。ただこれらの語の意味を日本語で峻別するのは困難なので、ひとまず「勇士」としておく。これに「騎士」を意味する*ritter*が加わり、戦う身分の男を表わす語彙の一大グループを形成していた。『ヴィルギナール』主要3写本における各語の使用頻度を表にすると以下のようになる。

表1 ²⁴

	<i>helt</i>	<i>degen</i>	<i>recke</i>	<i>weigant</i>	<i>ritter</i>
V10 版 ²⁵ 14.199 行: 1.097 詩節、62 行欠 ²⁶	136 (9,6)	36 (2,5)	1 (0,07)	2 (0,14)	220 (15,5)
V11 版 ²⁷ 1.689 行: 130 詩節、1 行欠	18 (10,7)	3 (1,8)	10 (5,9)	0 (-)	9 (5,3)
V12 版 ²⁸ 11.193 行: 866 詩節、65 行欠	277 (24,7)	62 (5,5)	14 (1,3)	35 (3,1)	150 (13,4)

各欄の上段は例数を、下段は1.000 行あたりの出現数を示す。(以下の表2・5・6も同様。)

『ヴィルギナール』は1詩節が13行から成る「ベルン詩節」(Berner Ton)で構成されている。またその1「行」は、中世ドイツ文芸の通例と同じく、原則としてアクセントのある揚格(Hebung)とアクセントのない抑格(Senkung)が交互に4度現われて8音節から成る。

表1からは、写本によって、また語によって使用頻度が多様であることが見て取れる。全体として*helt*と*ritter*が好んで用いられるのは中世の英雄叙事詩に共通の傾向である²⁹。しかしここではとくに*weigant*に注目する。「勇士」を表わす語彙の中でもとりわけ古態とされるこの語がV12では他写本との比較においてだけでなく、中世ドイツ文芸一般の傾向と比べても例外的

といえるほどの高い頻度で用いられているからである³⁰。そこで以下に、この語の「リーन्हルト・ショイベルの英雄本」における出現頻度を見る。

表2³¹

	<i>helt</i>	<i>degen</i>	<i>recke</i>	<i>weigant</i>	<i>ritter</i>
ヴィルギナール (V2) 11.193 行: 866 詩節、65 行欠	277 (24,74)	62 (5,53)	14 (1,25)	35 (3,12)	150 (13,40)
アンテロイ 264 行: 33 詩節	10 (37,87)	1 (3,78)	2 (7,57)	0 (-)	1 (3,78)
オルトニート (y) 3.544 行: 443 詩節	58 (16,36)	23 (6,48)	2 (0,56)	4 (1,12)	19 (5,36)
ヴォルフディートリヒ (y) 17.058 行: 2.131 詩節 + 10 行[a]	346 (20,28)	194 (11,37)	4 (0,23)	99 (5,80)	401 (23,51)
ニーベルンゲンの歌 (k) 19.536 行: 2.442 詩節	536 (27,43)	229 (11,72)	90 (4,61)	108 (5,52)	328 (16,78)
ロレンゲル 換算総数 2.438 行[b]	83 (34,04)	14 (5,74)	1 (0,41)	9 (3,69)	98 (40,20)

- [a] 『ヴォルフディートリヒ』では上述のように、『アンテロイ』・『オルトニート』・『ニーベルンゲンの歌』と同じく「ヒルデブランド詩節」(Hildebrandston: 各4揚格の8行が1詩節を構成する)から成るが、10行の詩節がひとつ、12行の詩節がふたつあるため合計10行多い。
[b] 『ロレンゲル』の韻律である「クリングゾールの黒い調べ」はきわめて複雑かつ巧妙に作られた詩形で、1詩節全体で56の揚格をもつ。そのため1行を4揚格とすると、14行となる。全体で207詩節あるが、そのうち32詩節と数行が失われている。

『アンテロイ』や『オルトニート』のように、*weigant*がそもそも用いられていない、あるいは用いられていても頻度が低い作品はある。しかしその他の作品では、数値的には大きくないものの、他の写本に掲載された諸作品と比べて度合いがはるかに高いことを指摘したい。典型的な対照をなすのは、『ニーベルンゲンの歌』の写本Bであろう。(「ショイベルの英雄本」に掲載されているのは写本kである。)13世紀半ばに製作され、今日もっとも頻繁に研究対象とされかつ翻訳もされている写本Bでは*wigant* (*weigant*の古形)の用例がわずか2つしかないのに対し、写本kではこの語が108回現われる。写本Bの韻律は「ニーベルンゲン詩節」(Nibelungenstrophe: 4揚格5行+3揚格3行)であり、全体で2,376詩節あることからこれを1行当たり4揚格に換算すると17,226行となる。それに対してヒルデブランド詩節の写本kは19,536行であるから、写本kの方がやや分量が多いとはいえる。しかし用例数はほぼ1対50であり、「古態」とされる語がよりによって約250年後の写本で頻繁に用いられているのは特異かつ注目すべき現象といえる。これを先の『ヴィルギナール』の対比例や『ヴォルフディートリヒ』および『ロレンゲル』とあわせて考えると、一定の傾向を示す現象と認めてよいと思われる。

上述のように『オルトニート』と『アンテロイ』では正反対の傾向が確認される。これが何に起因するかについて、筆者には今のところ仮説を提示することができない。『オルトニート』と『ヴォルフディートリヒ』は内容に強い関連性があるので、しばしば同一写本で連続して書かれている。ここで対象とする「英雄本」でもまさにそうなのだが、「戦士」を表わす語彙の使用傾向を見ると、それぞれの典拠が同一ではなく異なる先行写本だったか、あるいは典拠自体が既に異なる系統の混合態だったのかもしれない。

4.2. *weigant*と結びつく形容詞

この「英雄本」で「戦士」を表わす語彙はしばしば、たとえば「高貴な」を意味する*gut*, *wert*, *edel*, *her*などさまざまな形容詞によって修飾されているが、中でも重要なのは*kün* (「勇敢な」)

と結びつく例である。まず「表2」で示した語彙がいかなる頻度で形容詞と結びつくか、そして添えられる頻度が高い形容詞は何かを示す。

表3

	<i>helt</i>	<i>degen</i>	<i>recke</i>	<i>weigant</i>	<i>ritter</i>
ヴィルギナル(V12)	26,4% [73/277] <i>jung</i> 18, <i>kün</i> 16, <i>wert</i> 7, <i>stolz</i> 4	83,9% [52/62] <i>kün</i> 17[a], <i>edel</i> 7, <i>auserwelt</i> 5, <i>gut</i> 5, <i>stolz</i> 4	85,7% [12/14] <i>kün</i> 4, <i>wert</i> 3, <i>auserwelt</i> 2	88,6% [31/35] <i>kün</i> 28[b]	52,0% [78/150] <i>wert</i> 16, <i>edel</i> 13, <i>gut</i> 11, <i>fein</i> 10, <i>kün</i> 8
アンテロイ	10% [1/10] <i>zage</i> 1	0% [0/1] (-)	50% [1/2] <i>stolz</i> 1	0 (-)	0% [0/1] (-)
オルトニート (y)	20,1% [12/58] <i>gut</i> 6, <i>kün</i> 2, <i>hochgemut</i> 2	78,3% [18/23] <i>edel</i> 4, <i>klug</i> 3, <i>gut</i> 2, <i>kün</i> 2, <i>unverzeit</i> 2	50% [1/2] <i>klein</i> 1	100% [4/4] <i>kün</i> 4	47,4% [9/19] <i>gut</i> 2, <i>stolz</i> 2, <i>wert</i> 2
ヴォルフディートリヒ (y)	10,1% [35/346] <i>kün</i> 9[c], <i>wert</i> 8, <i>gut</i> 6	90,7% [176/194] <i>kün</i> 42[d], <i>edel</i> 27, <i>lobesam</i> 15	50% [2/4] <i>hochgeborn</i> 1, <i>jung</i> 1	97,0% [96/99] <i>wunderkün</i> 48, <i>kün</i> 48	74,8% [300/401] <i>edel</i> 109, <i>gut</i> 51, <i>fein</i> 48, <i>wert</i> 38, <i>unverzeit</i> 26
ニーベルンゲンの歌 (k)	78,0% [418/536] <i>kün</i> 27[e], <i>wert</i> 21, <i>gut</i> 15	79,9% [183/229] <i>kün</i> 84[f], <i>edel</i> 25, <i>gut</i> 22	34,4% [31/90] <i>kün</i> 6, <i>wert</i> 4, <i>unverzeit</i> 4	92,6% [100/108] <i>kün</i> 71, <i>wunderkün</i> 28	71,3% [234/328] <i>gut</i> 57, <i>stolz</i> 31, <i>unverzeit</i> 31, <i>fein</i> 28
ロレンゲル	16,9% [14/83] <i>wert</i> 2, <i>jung</i> 2	64,3% [9/14] <i>gut</i> 2, <i>edel</i> 2	100% [1/1] <i>gut</i> 1	88,9% [8/9] <i>kün</i> 5, <i>wunderkün</i> 3	61,2% [60/98] <i>fein</i> 15, <i>stolz</i> 8, <i>her</i> 8, <i>edel</i> 6

表中、[X/Y]で示したのは全用例 (Y) に占める形容詞つきの例数 (X) である。その百分率を前に挙げた。ただし形容詞の用例は特に頻度の高いもののみを示した。また[a]のように註をつけた *kün* の例にはそれぞれ以下の数の *wunderkün* が含まれる: [a] 2; [b] 5; [c] 2; [d] 13; [e] 2; [f] 11。

注目すべきはやはり *weigant* である。ほとんどすべてといってよいほどの確率で *kün* またはその強調形 *wunderkün* と結びついている。先に見た *weigant* の用例が多い作品だけでなく、『オルトニート』のようにわずか4例しか用いられてない作品でもすべてが *kün* とともに現われている。形容詞 *kün* は他の語にもしばしば結びついているが、*weigant* の場合は圧倒的である。この点をさらに明示する形で表にすると以下ようになる。

表4

	<i>wunderkün</i>	<i>kün</i>	他形容詞つき	形容詞なし	用例総数
ヴィルギナル (V12)	5 (14,3%)	23 (65,7%)	2 (5,7%)	5 (14,3%)	35
オルトニート (y)	0 (-)	4 (100%)	0 (-)	0 (-)	4
ヴォルフディートリヒ (y)	48 (48,5%)	48 (48,5%)	1 (1,0%)	2 (2,0%)	99
ニーベルンゲンの歌 (k)	28 (25,93%)	71 (65,74%)	1 (0,92%)	8 (7,41%)	108
ロレンゲル	3 (33,3%)	5 (55,6%)	0 (-)	1 (11,1%)	9

*weigant*と*kün*ないし*wunderkün*には明らかに強い共起性がある。ここに写本筆者の個性または嗜好を読み取ることができると考える。さらに、この人物には名詞*wunder*（「不思議」「驚異」を意味し、現代ドイツ語の*Wunder*に相当）を形容詞と接合して強調形をつくる傾向もある。

表5

	<i>wunder</i>	<i>-kün</i>	<i>-schon</i>	<i>-balt</i>	<i>-groß</i>	<i>-hart</i>	<i>-fest</i>	<i>-scharf</i>	<i>-schnell</i>	<i>-stark</i>	<i>-stolz</i>
ヴィルギナール (V12)	22 (1,96)	5 (0,44)	5 (0,44)	3 (0,26)	1 (0,09)	1 (0,09)	0 (-)	0 (-)	0 (-)	0 (-)	0 (-)
アンテロイ	1 (0,003)	0 (-)	0 (-)	0 (-)	0 (-)	0 (-)	0 (-)	0 (-)	0 (-)	0 (-)	0 (-)
オルトニート (y)	10 (2,82)	0 (-)	5 (1,41)	0 (-)	0 (-)	0 (-)	0 (-)	0 (-)	0 (-)	0 (-)	1 (0,28)
ヴォルフディートリヒ (y)	24 (1,40)	113 (6,62)	11 (0,64)	6 (0,35)	0 (-)	0 (-)	1 (0,06)	1 (0,06)	0 (-)	0 (-)	2 (0,11)
ニーベルンゲンの歌 (k)	41 (2,09)	89 (4,55)	18 (0,92)	0 (-)	0 (-)	0 (-)	0 (-)	0 (-)	1 (0,05)	1 (0,05)	1 (0,05)
ロレンゲル	15 (6,15)	7 (2,87)	0 (-)	0 (-)	0 (-)	0 (-)	0 (-)	0 (-)	0 (-)	0 (-)	0 (-)

用例の左端が名詞 *wunder* で、その右はこれにより強調される形容詞 *kün* 「勇敢な」、*schon* 「美しい」、*balt* 「勇敢な」、*groß* 「大きい」、*fest* 「堅固な」、*hart* 「固い」、*scharf* 「鋭い」、*schnell* 「勇敢な」、*stark* 「強い」、*stolz* 「誇り高い」である。

『アンテロイ』を別にすると、すべての作品で*wunder*が形容詞を強調している例がある。とくに『ヴォルフディートリヒ』と『ニーベルンゲンの歌』ではこの傾向が抜きん出て強い。『ロレンゲル』では*kün*とのみ結びついているが、こうした例は却って、この写本における*wunder*と*kün*の「結びつきやすさ」を示すものとも考えることもできるのではないだろうか。この作品を、「白鳥の騎士」を主題にしながらアーサー王物語系列とドイツ語圏の伝統的英雄伝説の人物を両方登場させ、しかもきわめて複雑な韻律構造で構成された実験的な作品であるとみなすことが許されるなら、そこにおける*weigant*と*kün*および*wunderkün*の結びつきにはある種の意志が働いていると思われる。

この問題の解明にはまだ考慮しなければならない点が多々あるが、その第一歩として『ヴィルギナール』V12に現われた名詞*wunder*およびこれにより強調される形容詞を他写本版と対比してみる。

表6

	<i>wunder</i>	<i>-kün</i>	<i>-schon</i>	<i>-balt</i>	<i>-groß</i>	<i>-hart</i>
V10 版	22 (1,54)	0 (-)	0 (-)	0 (-)	0 (-)	0 (-)
V11 版	3 (1,77)	1 (0,59)	0 (-)	0 (-)	0 (-)	0 (-)
V12 版	22 (1,96)	5 (0,44)	5 (0,44)	3 (0,26)	1 (0,09)	1 (0,09)

「シヨイベルの英雄本」の『ヴィルギナール』V12が*wunder*による形容詞の強調形を用いる傾向が強いことは明らかであろう。もちろんこれだけで断定するわけにはいかないが、一つの個性として認めてよいと考える。

5. 「聖者」一展望にかえて

ここまで述べてきた「戦士」を表わす語彙とこれに関連するデータは「リーンハルト・ショイベルの英雄本」の特徴のひとつと思われるが、これは今のところ仮説の域を出ない。筆者はこの「英雄本」の全作品を網羅的に調査したが、他写本に記載された作品で比較したのは『ヴィルギナール』のV11・V12と『ニーベルンゲンの歌』のBのみである。この「英雄本」の特徴をより包括的に調査するためには、当然他の写本に掲載された諸作品、とくに異本が多い『オルトニート』・『ヴォルフディートリヒ』・『ニーベルンゲンの歌』の諸写本との比較も必要になる。前二作品については印刷本も視野に入れる必要がある。ただ当面の課題は目下進行しつつある『ヴィルギナール』の校訂版編纂に資することである。そこで再びこの作品に注目したい。

まず目立つのは、この作品に聖ヨハネの名前が出ることである。その場面を仮訳する。

二人の勇敢な男（主人公ディートリヒと家臣で軍師でもあるヒルデブラント）が馬に乗ると、騎士道の作法にしたがって楯と槍が両者に渡された。聖ヨハネの慈愛と恵み（ワイン）もふたりに捧げられた。

このワインは是非にと求められ、また急いで用意された。一人の司祭がすぐに持ってきて、二人はともにこれを飲んだ。清らかに流れるワインには、神の恵みが与えられていた。はたしてこれを飲む者は、いかなる危害や苦難からも守られることになった。まず若い主君が一気に飲み、ヒルデブラント殿は間をおいてから盃の底に一滴も残さず飲み干した。そして言った。「さあ、殿、森へ出陣です。それでもう、我らにあの異教徒が危害を加えることなどできません。」（『ヴィルギナール』43節9行－44節13行）³²

ここにいうヨハネは、洗礼者ではなく使徒のことである。よく知られているように、使徒ヨハネは毒入りのワインを飲まされたがその毒は何ら効かなかった。このワインはあらかじめヨハネのために成聖されていたので、彼は毒のあらゆる危険を免れることができたのである。この伝説は早くから広まっており、「聖ヨハネの慈愛を飲む」や「聖ヨハネの恵みを飲む」は定形表現となっていた³³。『ヴィルギナール』の記述はこの伝説に着想をえたと考えられる。ただ、同じ作品でも写本V10とV11にはこうした場面がない。またそもそも、聖人の名が言及されることもない。したがって、聖ヨハネがこの「英雄本」の『ヴィルギナール』のみで言及されるのであれば、単なる例外的現象とみなすほかないであろう。しかし実態は異なる。「英雄本」最後の作品である『ロレンゲル』でも同じ表現が用いられているからである。

多くの人たちの敬虔な祈りが聞こえた。ミサが済むと彼ら（ロレンゲルと騎士たち）には祝福が捧げられ、彼らは聖ヨハネの慈愛を飲んだ。（『ロレンゲル』171節6－8行）³⁴

この写本の最初と最後の作品で、ともに同じ聖者が同じ文脈で登場することに、何らかの意図を見出そうとするのは穿ちすぎかもしれない。それはともかく、以下にヨハネを初めとする聖人が「英雄本」に出現する例のデータを示す。

1. 聖ヨハネ (*sant Johannes*)

『ヴィルギナル』1例 (43節12行)

『ヴォルフディートリヒ』2例 (1952節4行a・2039節3行a)。以下のaは行の前半, bは後半を示す。

『ニーベルンゲンの歌』6例 (730節3行a・746節4行a・1428節3行a・1505節4行a・1844節1行a・2135節1行a)

『ロレンゲル』1例 (171節8行)

2. 聖ゲオルギウス (*sant Jörg*)

『ヴォルフディートリヒ』14例 (209節3行b・212節3行a・215節2行a・216節3行a・219節1行a・222節4行a・232節1行a・437節1行b・513節1行a・1032節1行a・1237節4行a・1243節3行a・1569節4行a・2036節3行b)

3. 聖ヤコブ (*sant Jacob*)

『ヴォルフディートリヒ』1例 (298節4行b)

4. 聖パンクラティウス (*sant Pangracz*)

『ヴォルフディートリヒ』1例 (538節3行a)

5. 聖女クリスティナ (*sant Crystine*)

『ヴォルフディートリヒ』1例 (1477節3行a)

聖ヨハネは4作品で登場する。中でも『ニーベルンゲンの歌』における頻度の高さは目につく。これらの例はすべて(使徒ヨハネではなく)授洗者ヨハネと思われるが、混同されている可能性は否定しきれない³⁵。また今日公に認められている聖者たちと過去の聖者が必ずしも一致しなかったことがありえるかもしれない。しかしさきに挙げた写本Bの場合、ヨハネだけでなくいかなる聖者も一度も言及されない。これを考え合わせると、聖ヨハネの頻出が「英雄本」の特徴であるとみなすことができよう³⁶。

『ヴォルフディートリヒ』の場合、聖ヨハネは2度のみだが、他の聖者はすべてこの作品に現われている。中でも聖ゲオルギウス(300年頃)の言及頻度が突出している。これは聖ゲオルギウスが竜退治伝説で広く知られていたことに由来するのだろう。ヴォルフディートリヒ自身がオルトニートを殺めた竜を退治するという筋立てだからである。それどころか、崇拝の対象として言及されるだけでなく、聖者自身が登場人物となって主人公の誕生を祝福している。

またここで言及される聖ヤコブは「ガリツィア(スペイン)に埋葬されている」という記述から³⁷、(サンティアゴ・デ・コンポステーラに代表されるように)9世紀以来イベリア半島を中心に崇拝熱が高かった使徒ヤコブであろう。

一方聖女クリスティナはさしあたり「ボルセナの聖女クリスティナ」(3世紀の殉教者)と推測してよいと思われる。本文の記述は「聖クリスティナの湖も私(皇妃)の支配下にあった」であるが³⁸、イタリア中部のボルセナはたしかに大きな湖に臨む小都市である。

『ヴォルフディートリヒ』は写本伝承に複数の系統があり、さらに同一系統内でも異本が存在することから、研究が遅れている作品だった³⁹。しかし校訂版の刊行が最近盛んになっており、これらと比べると興味深い。ショイベルの「英雄本」のように聖者が頻繁に現われる写本からまったく現われない写本までさまざまだからである。

たとえば1476年の成立とされる「シュトラースブルク英雄本」(*Straßburger Heldenbuch*⁴⁰)

では、そこに記載された『ヴォルフディートリヒ』に聖ヨハネが2度(8141行a, 8145行a), 聖ゲオルギウスが3度(886行a, 907行a, 912行a), 聖パンクラティウス(4世紀の殉教者)が2度(2296行a, 4881行a)現われるのに対し、1472年におそらくニュルンベルクで成立した「ドレスデン英雄本」(Dresdener Heldenbuch⁴¹)では『ヴォルフディートリヒ』だけでなく他の作品でも聖者の名は一度も言及されない。これらのいわば中間形態とみなしうる写本も存在するが⁴², 今それらのすべてに立ち入って論じる力はない。他日を期したく思う。

【付記】

小稿は日本学術振興会科学研究費補助金(基盤研究(C)・課題番号23520358)の助成を受けて行う研究の成果の一部であり、2012年12月15日に北海道ドイツ文学会(於北海道大学)で口頭発表した際の草稿に大幅な加筆と修正を加えたものである。発表の際貴重なご意見と建設的なご批判をいただいたすべての方々に深く御礼を申し上げたい。また準備の段階でエルンスト・ヘルガルト氏(Herrn Prof. Dr. Ernst Hellgardt)とエリーザベト・ヴンダーレ氏(Frau Dr. Elisabeth Wunderle)にはさまざまなお導きをいただいたが、ご教示のすべてを生かすことはできなかった。今後の課題としたい。なおここで挙げた統計表やデータは、すべて大学院教育学院多元文化教育論講座の学生諸氏に検証していただいた。あらためて感謝する次第である。

注

- 1 とくにプレーメン大グループ、ニュルンベルク大グループおよびオーストリアの個人研究者が精力的に取り組んでいる。
- 2 Terada Tatsuo: Kriegerbezeichnungen in der Dietrichepik. 『独語独文学研究年報』32 (2005), S. 57-79; 同: Der Wortschatz bei ›Virginal‹ — Versionen (V10), (V11) und (V12) —. Teil 1: Kriegerbezeichnungen. 『独語独文学研究年報』36 (2009), S. 62-79 (改訂版URI: <http://hdl.handle.net/2115/44810>); 同: Der Wortschatz bei ›Virginal‹ — Versionen (V10), (V11) und (V12) —. Teil 2: Heiden und außer- sowie übernatürliche Wesen. 『メディア・コミュニケーション研究』58 (2010), S. 137-152 (改訂版URI: <http://hdl.handle.net/2115/44813>); 同: Der Wortschatz bei ›Virginal‹ — Versionen (V10), (V11) und (V12) —. Teil 3: Topoi. 『メディア・コミュニケーション研究』59 (2010), S. 77-94; 同: Zum Wortschatz in *Lienhart Scheubels Heldenbuch*. Neue Beiträge zur Germanistik 11 (2012), S. 101-114.
- 3 写本に関する簡潔な記述が(<http://www.handschriftencensus.de/3627>)で閲覧できる。(2013年3月30日確認。)
- 4 以下の校訂版を用いた。›Virginal‹: Dietrichs erste Ausfahrt. Hrsg. von Franz Stark. Stuttgart: Der litterarische Verein in Stuttgart 1860; ›König Anteloy‹: Margarete Springeth/Ulrich Müller: Das Erzähl-Lied von König Anteloy/Antelan aus der Wiener Piaristen-Handschrift ("Lienhart Scheubels Heldenbuch"). Transkription und Erläuterungen. In: Rostocker Beiträge zur Sprachwissenschaft 7 (1999), S. 289-306; ›Ortnit‹ und ›Wolfdietrich‹: Ortnit und Wolfdietrich nach der Wiener Piaristenhandschrift. Hrsg. von Justus Lunzer. Tübingen: Der litterarische Verein in Stuttgart

- 1906, S. 1–57 und S. 58–310: ›Nibelungenlied‹: Margarete Springeth: Die *Nibelungenlied*-Bearbeitung der Wiener Piaristenhandschrift (Lienhart Scheubels Heldenbuch: Hs k). Transkription und Untersuchungen. Göppingen: Kümmerle 2007: ›Lorengel‹: Lorengel. Edité avec introduction et index par Danielle Buschinger. Mélodie éditée par Horst Brunner. Göppingen: Kümmerle 1979.
- 5 Der Schwarze Ton. 訳語は岸谷敏子・柳井尚子(訳著)『ワルトブルクの歌合戦』東京: 大学書林1987年の21頁による。
 - 6 Klaus Klein: Beschreibendes Verzeichnis der Handschriften des *Nibelungenliedes*. In: Die Nibelungen. Sage – Epos – Mythos. Hrsg. von Joachim Heinzle/Klaus Klein/Ute Obhof. Wiesbaden: Reichert 2003, S. 213–238. なお『ニーベルングの歌』の諸写本では、少なくとも完本の場合、あとに『哀歌』(›Klage‹)が続くのが通例で、「シヨイベルの英雄本」に載る写本kは、写本nとともにこの『哀歌』を欠く珍しい例である。
 - 7 Xenja von Ertzdorff: Linhart Scheubels Heldenbuch. In: Festschrift für Siegfried Gutenbrunner zum 65. Geburtstag. Hrsg. von Oskar Bandle/Heinz Klingenberg/Friedrich Maurer. Heidelberg: Winter 1972. S. 33–46, hier S. 33.
 - 8 Werner Hoffmann: Spätmittelalterliche Bearbeitung des Nibelungenliedes in Lienhart Scheubels Heldenbuch. In: Germanisch-Romanische Monatsschrift N. F. 29 (1979), S. 129–145, S. 132による。
 - 9 原田晶子「寄進の変容と継承にみる後期中世ドイツの市民と教会—帝国都市ニュルンベルクの両教区教会を例として—」『地域文化研究専攻紀要』5 (2001) 230–251頁の232頁。
 - 10 シヨイベルの名が記載された写本はもう一点確認されている (Klaus Graf: Exemplarische Geschichten. Thomas Lirers ›Schwäbische Chronik‹ und die ›Gmünder Kaiserchronik‹. München: Fink 1987, S. 37)。マルガレーテ・シュプリングト (Margarete Springeth 註4, S. 21) によると、シヨイベルが所有していたとみられる写本がさらに一点存在するものの、個人蔵のため研究資料として用いることが困難であるという。
 - 11 たとえばHoffmann (註8), S. 132。ただしホフマンは可能性の指摘にとどめている。
 - 12 Peter Jörg Becker: Handschriften und Frühdrucke mittelhochdeutscher Epen. Wiesbaden: Reichert 1977, S. 157.
 - 13 ベッカー(前註) 同頁ほか多数。
 - 14 Victor Millet: Germanische Heldendichtung im Mittelalter. Berlin/New York: de Gruyter 2008, S. 425.
 - 15 寺田龍男「軍記物語と英雄叙事詩(2)—J. Bumkeによる「不確定テキスト」(‘der unfeste Text’)の概念を中心に—」『大学院国際広報メディア研究科・言語文化部紀要』49 (2005) 89–107頁の100頁。
 - 16 なお中世ドイツ文学の作品で唯一、著者 (Autor/en) による作品 (写本) が残るものとして『新パルツィファル』(der ›Nüwe Parzifal‹, Parzifal von Claus Wisse und Philipp Colin. (1331–1336). Hrsg. von Karl Schorbach. Straßburg: Trübner 1888. Nachdruck Berlin/New York: de Gruyter 1974. Vgl. auch Joachim Bumke: Autor und Werk. Beobachtungen und Überlegungen zur höfischen Epik. In: ZfdPh 116 (Sonderheft) 1997, S. 87–114) がある。現在ドイツ語圏で複数のプロジェクトが進行中であるものの、この作品の研究はまだ十分とはいえず、今後の進展が期待される。とくに作品の依頼から成立・受容にいたるプロセスの研究には困難が多く、日本を含む他の文化圏との比較によって新たな視点を提示することは可能と思われる。
 - 17 後述する『ヴィルギナール』V11版を含む「ドレスデン英雄本」が1472年にニュルンベルクで成立したと推定されている。Das Dresdener Heldenbuch und die Bruchstücke des Berlin-Wolfenbütteler

- Heldenbuchs. Edition und Digitalfaksimile. Hrsg. von Walter Kofler. Stuttgart:Hirzel 2006, S. 9を参照。
- 18 Hans-Joachim Koppitz: Studien zur Tradierung der weltlichen mittelhochdeutschen Epik im 15. und beginnenden 16. Jahrhundert. München:Fink 1980, S. 64, 76–79.
- 19 Gisela Kornrumpf: Strophik im Zeitalter der Prosa: Deutsche Heldendichtung im ausgehenden Mittelalter. In: Literatur und Laienbildung im Spätmittelalter und in der Reformationszeit. Symposium Wolfenbüttel 1981. Hrsg. von Ludger Grenzmann / Karl Stackmann. Stuttgart: Metzler 1984. S. 316–340, hier S. 336; dies.: Lienhart Scheubels Heldenbuch. In: Killy Literaturlexikon. Autoren und Werke des deutschsprachigen Kulturraumes. 2., vollständig überarbeitete Auflage. Hrsg. von Wilhelm Kühlmann u. a. Bd. 10. Berlin/New York: de Gruyter 2011. S. 321f., hier S. 321. Vgl auch Kofler (註17), S. 51.
- 20 Hermann Menhardt: [Codex] 15478. In: (ders.): Verzeichnis der altdeutschen literarischen Handschriften der österreichischen Nationalbibliothek. Bd. 3. Berlin: Akademie 1961. S. 1426–1430, hier S. 1430.
- 21 Ertzdorff (註7), S. 42.
- 22 この点は同じ中世の日本文学とも比較検討の余地があると思われる。寺田龍男「中世ドイツ文学の発信型研究の試み—日本文化を出発点として—」『メディア・コミュニケーション研究』61 (2012) 169–184頁の173頁を参照。
- 23 註2を参照。
- 24 本表はTearda (2009)の改訂版(註2)による。
- 25 校訂版Deutsches Heldenbuch. 5. Teil. Dietrichs Abenteuer von Albrecht von Kemenaten nebst den Bruchstücken von Dietrich und Wenezlan. Hrsg. von Julius Zupitza. Berlin: Weidmann 1870. Unveränderter Nachdruck Hildesheim: Weidmann 2004, S. 1–200.
- 26 なお以下「欠」は写本の紙の「欠損」と「判読不能」の両方の意味で用いる。
- 27 校訂版Das Dresdener Heldenbuch (註17), S. 360–392.
- 28 校訂版は註4を参照。
- 29 Terada (2005) (註2)を参照。
- 30 Joachim Bumke: Studien zum Ritterbegriff im 12. und 13. Jahrhundert. Heidelberg: Winter 2. Auflage. 1977, S. 32–34を参照。
- 31 以下の表2・3・4・5・6はTerada (2012) (註2)による。
- 32 *auf sassen die zwen küne man, / man raicht in dar die schilde, / zwei sper nach ritterlicher art: / auch sant Johannes minn und segen / den fursten da gegeben wart. // Er ward gehaischet und gemant. / ein kapelan bracht in zu hant, / die herren trunken beide. / gesegnet waz die reine flut: / wer in da trank, der waz behut / vor schaden und vor leide. / der junge fürst und der hub an / zu trinken an der stunde, / her Hildebrant sich bas besan, / er trank die schalen zu grunde. / er sprach: 'wol auf nun, in den tan! / uns von dem ungetauften man / auch nimmer leit geschehen kan.'*
- 33 校訂版 (註4), S. 320およびJacob Grimm: Deutsche Mythologie. 4. Auflage. Bd. 1. Berlin: Dümmler 1875. Nachdruck Frankfurt/Main: Ullstein 1981, S. 49f.を参照。
- 34 *manch andechtigeß pett ward da vernunnen. / Da nu daz ampt waz gar volbracht, da gab man in den segen. / si truncken sant Johanneß mynn.*

35 Grimm (註33), S. 522.

36 聖ヨハネがしばしば言及される作品として、ニュルンベルク出身のクリスティーネ・エーブナー (Christine Ebner:1277-1356) による『神の恩寵の大きすぎる重みについて』(Von der Gnaden Überlast または『エンゲルタルの修道女のための書』(Engelthaler Schwesternbuch) ともいう)がある。この作品では聖者の登場回数が全体で42にのぼるうち、聖ヨハネが12回を占めている。このうち授洗者が7回、使徒ないし福音書作者が4回である。(他に区別できないもの1例。)エーブナー家が14世紀前半当時はニュルンベルクの参事会を構成する門閥のひとつだったこと(原田(註9), 232頁)と聖ヨハネが頻出することだけで、「シヨイベルの英雄本」をニュルンベルクと結びつけることはもとよりできない。註17および本文末尾で挙げた「ドレスデン英雄本」もニュルンベルクで書かれたのがほぼ確実視されているものの、聖ヨハネは一度も登場しない。しかしこのような反証があってもなお、考慮に値する作品であると考えている。同書の校訂版(Der Nonne von Engelthal Büchlein von der genaden uberlast. Hrsg. von Karl Schröder. Tübingen:Laupp 1871)の入手のため特段のご好意にあずかった原田晶子氏に厚く御礼を申し上げる。

37 *Galicz ist auch min aygen, und da sant Jacob lit.* [›Wolfdietrich‹ Str. 298, 4]

38 *Der see von sant Crystinen waz mir auch undertan*: [›Wolfdietrich‹ Str. 1477, 3]

39 複雑な系統の整理を試みた成果のひとつとしてリュディア・ミクラウチュ(Lydia Miklautsch)の *Montierte Texte – hybride Helden. Zur Poetik der Wolfdietrich-Dichtungen*. Berlin/New York:de Gruyter 2005がある。

40 *Das Straßburger Heldenbuch. Rekonstruktion der Textfassung des Diebolt von Hanowe*. 2 Bde. Hrsg. von Walter Kofler. Göttingen:Kümmerle 1999.

41 註17を参照。

42 Ortnit und Wolfdietrich D. Kritischer Text nach Ms. Carm. 2 der Stadt- und Universitätsbibliothek Frankfurt am Main. Hrsg. von Walter Kofler. Stuttgart:Hirzel 2001; Wolfdietrich B. Paralleledition der Redaktionen B/K und H. Hrsg. von Walter Kofler. Stuttgart:Hirzel 2008; Ortnit und Wolfdietrich A. Hrsg. von Walter Kofler. Stuttgart:Hirzel 2009.

Some Comments on *Lienhart Scheubels Heldenbuch* in the Perspective of a Japanese Germanist

Tatsuo TERADA

Abstract

Lienhart Scheubels Heldenbuch (written 1480/90) is, though almost unknown, a codex with an emphasis on heroic poetry, and one of the most important German manuscripts. The book contains ›Virginal‹ (V12), ›King Anteloy‹, ›Ortnit‹ (y), ›Wolfdietrich‹ (y), ›Nibelungenlied‹ (k) and ›Lorengel‹.

This paper has the following purposes:

1. To introduce the manuscript to readers in Japanese, to explain the current topics of discussion surrounding this book, and to point out further issues which should be examined. (In several points it is to be expected that the research of non-German cultures would contribute to furthering this discussion.)
2. To show some tendencies of the copier (or editor) who wrote all the works alone: According to the statistical tables he was certainly inclined to use the noun *weigant* (hero) and the adjectives *kün/wunderkün* (‘brave’ / ‘wonderbrave’) and to combine them with each other.
3. To call attention to the fact that several saints often appear in this book: St. John, St. George, St. Jacob, St. Pancras and St. Christina. St. John is referred to in the four works: ›Virginal‹, ›Wolfdietrich‹, ›Lorengel‹ and especially often in the ›Nibelungenlied‹, while the other saints are mentioned only in ›Wolfdietrich‹. In regard to references to saints, some other versions of the ›Wolfdietrich‹-poetry possess the same tendency, but the frequent appearance of St. John could be interpreted as one of the characteristics of *Lienhart Scheubels Heldenbuch*.